

新・江戸東京研究に向けて：HOSEIミュージアム 江戸東京研究センター特別展〈人・場所・物語〉：“Intangible”なもので継承する江戸東京のアイデンティティ

TANAKA, Yuko / 田中, 優子

(出版者 / Publisher)

HOSEIミュージアム

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

BULLETIN OF HOSEI UNIVERSITY MUSEUM / HOSEIミュージアム紀要

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

7

(終了ページ / End Page)

25

(発行年 / Year)

2022-03-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025246>

<特別寄稿>

新・江戸東京研究に向けて
HOSEI ミュージアム 江戸東京研究センター特別展
〈人・場所・物語〉—“Intangible” なもので継承する江戸東京の
アイデンティティ

田中優子

新・江戸東京研究とは

最初に、江戸東京研究センター（この後は略称である EToS と記載する）とは何か、説明しようと思う。EToS は法政大学が文科省の「私立大学研究ブランディング事業」に応募し、人文社会系と理工情報系の融合分野による研究「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」として、平成 29（2017）年度に採択されたことを契機として立ち上げた研究組織である。

事業期間は 5 年であった。しかし平成 30 年 7 月 4 日に元科学技術・学術政策局長が受託取崩容疑で逮捕、起訴されたことによって、ブランディング事業全体が中止に追い込まれた。事件の概要は、佐野元局長が東京医科大学元理事長等より「平成 29 年度私立大学研究ブランディング事業」について、同大学が提出する「事業計画書」の記載等を助言・指導するなどの有利かつ便宜な取り計らいを受けたい旨の請託を受け、その謝礼であると知りながら自己の次男に対し同大学の平成 30 年度入試において加点を受け合格したことが、受託取崩罪に当たるとされたものであった。

従って本研究センターの立ち上がりは助成金によるものであったが、その後は文科省職員の不正によって約束された研究助成金を受け取れないまま、メンバーの突出した研究力によって

多くの成果を上げ、今日に至っているものである。

このことを記述した意図は、第一に、私立大学が新しい研究組織を立ち上げるには文科省等の助成金が必須であり、その継続にあたっては、助成金が大きな役割を果たすことを周知すべきだからである。とりわけ「私立大学研究ブランディング事業」は、私立大学が数十年に渡って培ってきた個性ある研究を大学の存在感に結びつける稀有な機会であり、私立大学にとって極めて重要な企画であった。にもかかわらず文科省局長の不正によってそれが中止されるという、あってはならないことが起き、研究の継続に大きな支障が出たことを、ここに記録しておくべきだからである。以上の理由で約束された助成金を受け取れないまま、EToS は突出した成果を挙げ続けている。センター設立の 2018 年 1 月から本展覧会までの 3 年半のあいだに、シンポジウム・研究会 89 回、そのうち国際シンポジウムは 13 回、延べ参加人数は 8630 人、書籍・報告書の刊行は 49 編、論文・学会発表は 126 件を数え、メディアへの登場も頻繁だった。

その成果のひとつが 2021 年 9 月 7 日～10 月 3 日に開催された「〈人・場所・物語〉—“Intangible” なもので継承する江戸東京のアイ

デンティティ」である。期間中の来場者数は652名を数え、本展覧会はミュージアム始めて以来、最大人数の来場者を迎えた。まさに江戸東京研究が法政大学の研究を代表するひとつであることを、学内外に示した機会だったのである。

法政大学の江戸文化研究の歴史は長く、戦前から戦後にかけては近藤忠義が、その後は廣末保、松田修が担ってきた。1985年には、工学部でイタリアの建築史・都市史を研究していた陣内秀信がヴェネツィアとの比較から、江戸と戦前の東京が水の都であったことなどを論じた『東京の空間人類学』でサントリー学芸賞を受賞した。その後陣内教授はイタリアの都市や建築の研究のみならず、江戸東京学でも活躍したのである。次の年の1986年には、第一教養部の田中優子が『江戸の想像力』で芸術選奨文部大臣新人賞を受賞し、その後は文学のみならず貿易、文化、メディアを含めた「江戸学」として研究を継続した。陣内秀信は水都の研究で、法政大学エコ地域デザイン研究センターを育て、田中優子は国際日本学研究所において、横山泰子、小林ふみ子とともに、江戸文化・江戸文学研究を推進してきた。

1980年代に小木新造氏の提唱で誕生した「江戸東京学」は、歴史学、民俗学、文学、建築、都市計画、考古学など多くの分野を結び、学際的な都市学、地域学として新たな研究領域を切り開いた。それまで、あらゆる学問が、〈江戸＝近世〉と〈東京＝近代〉を分けて考えていたのを打破し、江戸から東京への発展を連続性、断続性の両面から一つのパースペクティブのなかで研究する「江戸東京学」が生まれたのである。陣内も田中も、その江戸東京学に関わった。

それから35年以上がたち、東京研究も多岐に広がり多くの成果が生まれた。しかし80年代の伸びやかな学際的な交流は日本社会において薄れた。その中でのブランディング事業「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」は、法政大学エコ地域デザイン研究センターと国際日本学研究所の連携による「新・江戸東京研究」のスタートであった。

この江戸東京研究が従来と異なるのは工学系と文化系が結合した研究であるということだ。法政大学では、デザイン工学部をはじめ、理工系、生命系、情報系の研究者が活躍し、人文科学の法学、政治学、文学、哲学、歴史学、考古学、経済学、社会学でも、多くの高名な研究者が活躍して、江戸東京に関わる研究もおこなわれてきた。多摩キャンパスにおいては、東京の多摩地域に特化した「多摩の歴史・文化・自然環境研究会」が、長年にわたって重要な研究を蓄積した。しかしそれらは個々に学内外で活動してきたのであって、分野が結合して法政大学独自の流れを作る、ということに至っていなかった。研究拠点という場は、ひとつには学外の研究者たちとの交流の場として意味があるが、もうひとつには、学内で個々に動いている研究者たちがその場を共有することで、新たな研究の枠組みを生み出すことに意味がある。江戸東京研究センターはこのように、結びつき、交流し、ともに創造する場としての拠点となることをめざしている。「水都—基礎構造」「江戸東京のユニークさ」「テクノロジーとアート」「都市東京の近未来」という4つのプロジェクトが立ち上がっているが、すべてのプロジェクトが互いにかかわる方法をとっている。

都市環境や建築史といった理系の知が、現代

の課題解決につながるヒントを過去に求めるのに対し、歴史学、地理学、文学、文化研究のような文系は、江戸東京のそれぞれの時代の事象そのものに迫ろうとする、という違いを持っている。この違いを乗り越えて相互に補完し有機的に連携し、その知を今に活かしていくための模索を、江戸東京研究センターは続けているのである。このたびの展示も、都市環境から建築史、工学、歴史学、地理学、地図学、文学、文化史、社会課題、生活文化、娯楽文化など、多岐に渡る展示であった。

ところで、今回の展示の題名に使われた“Intangible”（不可視の）という言葉には、いかなる意味がこめられているのだろうか。江戸東京は、過去の大火・水害・震災・戦災と、それらによる幾度にもわたる消失を経験した。その結果建て替えが習慣化し、短い周期でスクラップ・アンド・ビルドをくり返し、さらなる変貌が続いた。それでも江戸東京のアイデンティティ、つまり文字通りの同一性を保持してきたのは、人々が変化変貌をみつめつつも、その底に流れ続けてきた水流、起伏に富んだ地形、大きな建造物ないし構造物ではない小さなモノで構成される生活空間のありよう、郊外の自然、江戸東京の地名、それぞれの場所にまつわる記憶と物語と言い伝え、そこに暮らした人々と活動と賑わいを、体験した語り伝えてきたからである。それらは目に見える「モニュメント」ではなく、見えないものつまり“Intangible”な遺産である。その認識から、本展示会はその“Intangible”な——つまり無形の遺産によって支えられてきた江戸東京らしさを考える展示とし、〈人・場所・物語〉—“Intangible”なもので継承する江戸東京のアイデンティティ、と名

付けたのである。

これらの“Intangible”な遺産は、江戸時代まで保っていた「持続可能性を優先した定常型社会」の上に成り立っていた。現代の東京は残念ながらそれとは正反対の方向に向かっているが、江戸との連続性を考えることで、過去を受け継ぎ、未来に向かう道筋を探ることは可能である。すなわち、この展示会は価値観の転換とその方向を示すことが、重要な目標のひとつであった。江戸東京研究センターのマニフェストは「持続可能な地球社会の実現に向け、近代のパラダイムを超えた、都市の未来を考えるために、私たちは、新・江戸東京研究に挑戦します」である。本展示会はまさに、このマニフェストに沿って企画されたものである。

展示は市ヶ谷キャンパス4会場を使った。まず概観である。Site_A（ミュージアム・コア）では、古代から現代を貫く〈水都〉としての江戸東京を展示した。Site_B（ボアソナード・タワー 博物館展示室）では、近世から近代に受け継がれた原風景としての水辺に関する様々な文献や図版を展示した。Site_C（ボアソナード・タワー 26階・ミュージアム・サテライト）では、近現代に息づく江戸東京のアイデンティティを示した。Site_D（外濠校舎6階・ミュージアム・サテライト）では、現代から近未来を見据えた「人のつながるコモンとしての街づくり」をテーマとした。

何を展示したか— Site_A

HOSEI ミュージアムの拠点、九段北校舎1階の「ミュージアム・コア」における展示のテーマは「水都」であった。この、〈水都〉江戸東京の展示を「Site_A」と呼んだ。Site_A

では「水都」の全体コンセプトを示した。「水の都市・東京」というビデオ映像では、25000年前の古東京川の位置を地図で確認でき、それが5000年前、1000年前と、どのように変化したかを見てとれた。さらに中世を経て江戸時代の水辺の利用につながり、近代の橋と川の変化、とりわけ1960年代の大きな変貌を経て今日に至るその歴史を概観できた。中世に照準を当てた「中世武蔵国絵図」では、水系と道を中心に、中世の関八州を眺望できる。それらの歴史を前提に、江戸時代の「水辺の能舞台」と「水辺の芝居町」を模型とCGによって作成し、見ていただいた。

水辺の能舞台とは、1848（弘化5）年に宝生大夫友于（ともゆき）によって晴天15日間にわたり江戸神田筋違橋門外にておこなわれた、江戸時代最後の一世一代勸進能の仮設能舞台である。「一世一代勸進能」とは能役者が一生に一度、幕府の許可を得ておこなう能で、一般の勸進能のように修繕費用などの目的をもたない。この能舞台は格式高いしつらえであったことから、復元にあたっては江戸城内の本丸奥舞台と、二の丸御殿水舞台を参考にした、ということだ。詳細は法政大学デザイン工学部建築学科・高村雅彦研究室「復元 江戸城能舞台と弘化勸進能」に報告されている。

さらに、ビデオ映像でも示した「江戸名所図屏風」を参考に、1630-50年ごろの木挽町芝居町を模型で再現し、見ていただいた。木挽町は東に江戸湊があり、西に三十間堀川がある。水辺から舟で若衆歌舞伎、人形浄瑠璃、軽業芸などの劇場や、湯屋に至ることができたと思われ、それらの建物が水辺に沿って立ち並んでいる。中橋あたりではないかと言われていたこの

シーンが木挽町5、6丁目であることを法政大学デザイン工学部建築学科・高村雅彦研究室の東京プロジェクトが突き止め、模型で再現した。詳細は常山真央・松浦由佳「江戸木挽町の芝居町と東京近代の大根河岸—水辺都市再生のための復元的考察—」として報告している。江戸のエンターテイメント空間がいかに水辺と繋がりが深いか、たいへんよくわかる展示であった。

何を展示したか— Site_B

ボアソナード・タワー14階の博物館展示室における展示を「Site_B」と呼んだ。Site_Bは「水辺の営み・都市の記憶と物語」と題し、近世から近代の水辺の営みを、様々な文献や図版を示して記憶と物語でたどった。

展示物は3つのテーマに分かれている。I「〈江戸〉概念の広域化」、II「江戸東京的景観：人・水・緑」、III「変貌を超え、歴史を貫く記憶とアイデンティティの継承」である。

I「〈江戸〉概念の広域化」は、時代をおって広域化した「江戸」の領域を確認し、明治以後の「東京」において行政区域が区分されるようになる状況を、様々な地図や図会で示した。ここからは展示物の詳細を理解していただき、さらなる関心をもっていただくために、I・II・IIIの全てにおいて、会期中の来館者に配布した詳細な資料を掲載する。これは文学部教授で、江戸東京研究センター・研究プロジェクトリーダーの小林ふみ子教授が作成したものである。

I 〈江戸〉概念の広域化

I-1 江戸名所の絵 大奉書1枚

鋏形蕙齋画 刊年不記載（江戸）須原屋伊八 刊

隅田川東岸、向島上空あたりに視点を定め、

江戸市中を見下ろし、はるか西に富士を望む鳥瞰図。1803（享和3）年の初版初印には本図では削除された彫工「野代柳湖」の名がある。表題は別本に付属する販売時の袋（上包み紙）による。絵師蕙齋自身、のちに肉筆で「江戸一目図屏風」（津山市郷土博物館蔵）を描き、さらに無款あるいは別の絵師の手によって同種の図様がくり返し出版された人気作の嚆矢。同じ体裁の日本列島鳥瞰図「日本名所の絵」の袋には鶴屋喜右衛門・和泉屋市兵衛・須原屋伊八の3書肆名があるといい、こちらもあるいは同様の出版か。

I-2 江戸大絵図 1 枚

石川流宣図 1713（正徳3）年（江戸）万屋清兵衛刊

江戸時代前期の江戸を代表する地図作者による江戸図。東は亀戸、西は内藤新宿、南は品川・目黒、北は田端・駒込・巣鴨あたりまで収めるが、地名・村名よりも大名・旗本の屋敷・領地を明記することに主眼がある。

I-3 東都番町図 大奉書 1 枚

瀬名貞雄・鼈峰依為質編 1755（宝暦5）年（江戸）美濃屋平七・吉文字屋次郎兵衛刊

江戸を分割した部分図である切絵図は幕末にさかんに出版されるが、その源流の1つ。江戸の部分図集としてはすでに17世紀に『江戸方角安見図』が出された例はあったが、それよりも一図の収録範囲を拡げ、一覧性を高めている。本図をはじめとする8図が出され、主版元の名から吉文字屋版と通称される。本図や続く「永田町絵図」（1759年刊）など武家地を対象としたものは、屋敷所有者の情報を正確に提供することに努め、屋敷替えを反映した変更が高い頻度でなされたと考えられている〔斎藤

1981〕。法政大学市ヶ谷図書館には、版元の1つが美濃屋から北畑氏（須原屋）に代わった後印の図の所蔵がある（291.3/86:WB）。

I-4 安見御江戸絵図 折本 1 帖

村子慶編 1769（明和6）年刊（江戸）志村屋次兵衛刊

前項に次ぐ、早期の切絵図集。序文は1764（宝暦14）年付けだが、同年の奥付をもつ本の所在は知られない。吉文字屋版に較べて精度では劣る面もあるが、現千代田・中央区、および港区・新宿区の江戸城に近い一部を1冊に収めた利便性のためか、その後も寛政、享和、弘化まで摺りを重ねているという〔斎藤1981〕

I-5 天保御江戸絵図 1 枚

高井蘭山図 1843（天保14）年（江戸）岡田屋嘉七刊

刊記によれば、1696（元禄9）年に原図が作られ、1822（文政5）年の改訂を経て、その後、それをもとにあらたに版を起こしたものの、東は中川、西は内藤宿の先の西新宿、北は大きく曲がった隅田川、南は目黒川を境とする。右下には江戸の年中行事が月日ごとに一覧にされ、第3部でみるように行事もまた都市の特性を示す重要なものと考えられていることがここでも看取される。

I-6 安政改正府郷御江戸大絵図 1 枚

高柴三雄撰 1854-60（安政）年間（江戸）須原屋茂兵衛・蔦屋吉蔵ら8肆刊

「府外の近村に至る迄書加」えたという本図は、東は荒川東岸の市川や柴又まで、南西は玉川の西まで収める。この広域図に需要があるほどに実態として近郊村落までふくめた都市圏が成立していたことがうかがわれる。右下は日本橋から各「遊覧場所」（行楽地）までの道程表。

I-7 明細改正東京新図 1 枚

井上勝五郎編・刊 1887 (明治 20) 年

明治 11 年に施行された 15 区、すなわち麹町区、神田区、日本橋区、京橋区、芝区、麻布区、赤坂区、四谷区、牛込区、小石川区、本郷区、下谷区、浅草区、本所区、深川区部をそれぞれ彩色した地図。同人による同様の図は明治 18 年、19 年のものも存在が確認される。周辺 6 郡まで収めてはいるが、江戸時代後期の諸図に較べると対象領域は狭くなっている。右下の一覧は各区・郡の町名村名一覧。

I-8 [名所絵入] 東京区分全図 附四日めぐり 独案内 1 枚

平野伝吉編・刊 1882 (明治 15) 年

東京 15 区を収めた図ながら、左右の本所・深川区の東端および牛込・赤坂区の西端は断ち切れ、収録域は限定的。左下は 15 区 6 郡とその町村名一覧。四周の名所案内は寺社や吉原など旧来の名所も含みつつも、橋梁や建築など明治の新名所を紹介する。

I-9 再校江戸砂子 半紙本 8 冊

菊岡沾涼編 1772 (明和 9) 年 (江戸) 須原屋伊八刊

江戸地誌の集大成となる『江戸名所図会』以前、地理情報を集積した刊行物として広く享受された地誌で、現存伝本も数多い。1732 (享保 17) 年初版以後、続編が出され、それらを統合し増補改訂したのが本書『再校江戸砂子』。巻一に江戸城周辺外濠内、巻二に浅草～千住、巻三に上野・駒込～王子、巻四に四谷～高井戸・世田谷、巻五で芝・麻布・品川方面、巻六で本所・深川～大島を収め、板橋方面は手薄ながらも現二十三区全域を視野に収めている。

I-10 江戸名所図会 大本 20 冊

斎藤幸雄・幸孝・幸成 (月岑) 編 長谷川雪旦画 大本 20 冊

1834 (天保 5) 年前半 10 冊・1836 年後半 10 冊 (江戸) 須原屋茂兵衛・伊八刊

江戸古町名主の斎藤家三代にわたって編纂された、江戸周辺の広域にわたる地誌。鳥瞰図を駆使して現実感を演出した町絵師長谷川雪旦の挿絵と相まって、江戸後期の都市の実相を伝える資料として広く、長く享受されつづけている。伝本は百を超えるが、本書は初印本の刊行後ほどなくして若干の修正を施して刊行されたとき後印本。全冊、浅葱色に小松模様型押し原表紙の左肩に「江戸名所図会」と摺られた辛子色の原題箋、角裂 (かどぎれ) の残る保存状態のいい伝本で、木箱に収められている。

I-11 風俗画報別冊新撰東京名所図会全 64 編 同東京近郊名所図会全 17 巻

1896 (明治 29) ～ 1911 (明治 44) 年 (東京) 東陽堂刊

明治期を代表する絵入誌『風俗画報』の臨時増刊として編まれた東京の地誌。写真、また山本松谷らその時代の絵師による色刷りの挿絵とともに、『江戸名所図会』挿絵の模刻も活用し、名所をはじめとする各地を江戸時代にさかのぼって紹介する。編集方針は「近代的」で、11 編までを東京にあらたに作られた公園に宛て、12～14 編を隅田堤、15 編を東京総説として以降、64 編までを 15 区ごとに編集する。その後刊行された全 17 巻は東西南北の近郊の名所を紹介する。

I-12 江戸方角名所杖 初編 中本 1 冊

又玄斎南可撰・立祥 (二代歌川広重) 画 幕末頃 (江戸) 大和屋喜兵衛刊

主要な江戸名所を図とかんたんな文章で紹介

した書。「杖」は「図会」と掛けて見物の道中の支えとなるという意。他機関蔵本の2編が1866（慶応2）年刊の奥付をもつため、本書の刊行はそれ以前と判明する。

I-13 東京方角名所杖 中本1冊

又玄斎南可撰・立祥（二代歌川広重）画 明治初年頃

（東京）大和屋喜兵衛 刊

前項『江戸方角名所杖』をそのままに「江戸」を「東京」と彫り変え、「八丁堀」「木挽町」の半丁と「正一位稲荷鉄砲洲」「築地門跡」の半丁のあいだに「新嶋原廓」「新取立地」（半丁）「異人居留地」「保亭留（ほてる）坂」（半丁）の一丁を新たにはさんだだけの安易な編集。明治初年の版元にとって、江戸と明治の違いはその程度の説明で事足りると考えられていたことの証左といえる。

I-14 東京名所三十六戯撰 大判錦絵画帖

昇斎一景画 1872（明治5）年（東京）万屋孫兵衛 刊

目録の図には「東京名勝三十六戯撰」。明治の新風俗を交えて、江戸東京の名所を当地における滑稽な一場面によって描く連作37図とその目録を画帖仕立てにする。一景は師系不明の明治初期の歌川派絵師で、作画期は1870～1874年とごく短い。掲出箇所は神田川が隅田川に合流する手前にかかる柳橋の上をゆく傘屋が傘を落としてゆく場面と、その手前の柳原（現、浅草橋付近）の舟上で女性が転んで放屁した場面（ほか）。

Ⅱの「江戸東京的景観：人・水・緑…水辺の景観への愛着とそこに必ず描かれる人の姿」では、江戸東京の絵画的表象のなかで水辺の美が

強調されていることを、ぜひ感じ取っていただきたいかった。人は水辺とともに生きた。以下はそれを表すために展示したⅡの資料である。資料の紹介からも、人と水辺の関係を感じていただけることだろう。

Ⅱ-1 絵本春の和歌葉 半紙本3冊

芍葉亭長根編・喜多川歌麿画 刊年不記載（江戸）丸屋文右衛門 刊

江戸の風俗名所を題とする狂歌本。歌麿はこの時期、狂歌師の発注による江戸名所絵本を多く手がけていたが、そのなかでも本書は稀覯本。1794（寛政6）年頃刊と推定される西村伝兵衛による初版時の『狂歌よもぎの島』の題簽では大英博物館に唯一の伝本が知られ、再摺にあたる本書の『絵本春の和歌葉』の題も本書のほかにも国立国会図書館の1本が判明しているのみ。さらにのち『絵本若葉栄』と改題された本も伝わる。掲出箇所は、かがり火をともし舟が並ぶ隅田川の白魚漁。しだいに小さくなるように描かれた遠景の舟や森が影絵で表され川面の暗さを暗示する。

Ⅱ-2 画本狂歌山また山 大本3冊

大原炭方編・北斎画 無刊記

江戸の中でも、牛込や市ヶ谷以西の山の手を舞台とした江戸名所狂歌集。江戸狂歌界を盟主大田南畝とともに牽引した朱楽菅江の有力門人便々館湖鯉鮒こと牛込在住の旗本大久保正武の連中が主導して制作した。初印は1804（享和4＝文化元）年（江戸）蔦屋重三郎刊。関口龍隠庵（現芭蕉庵）の菅江の狂歌碑と菅江らしき人物が描かれることから菅江の七回忌のために制作されたと考えられている。北斎が壮年期に可憐な美人造型をうち立てた時期の代表的な狂歌絵本の一つ。掲出箇所は神田川が外濠に落ち

るところ（現・飯田橋駅東口付近）で、魚をすくう男たちとその脇を、日傘をさして涼しげに通り過ぎる母と子。

Ⅱ-3 東遊 大本 1冊

浅草市人編・北斎画 1799（寛政11）年（江戸） 蔦屋重三郎 刊

この時期に江戸で流行し、多くの人士の参入を見た江戸狂歌の連中の中でも、とりわけさかんに北斎に挿絵を発注した浅草連中による春興（正月用）狂歌集。挿絵は見開き20図、半丁9図あり、のちに挿絵のみ彩色摺りで『画本東都遊』として刊行される。掲出図は墨田川河口の佃付近の白魚漁。船の綱と遙か西に望む富士山が相似形をなすように描かれているところに北斎の造形感覚がうかがわれる。

Ⅱ-4 江戸名所図会（狂歌本）半紙本 1冊

浅草庵（黒川）春村・千種庵諸持撰・柳川重信画 1837（天保8）年（江戸）千束庵蔵版

『江戸名所図会』の刊行に触発されて、日本橋・両国橋・浅草・隅田川・上野・日暮里の地と四季の題を取りあわせた狂歌集。口絵は彩色摺り。前編のみの伝存だが、本書の他、現存はUCLAバークレー校東アジア図書館蔵本が知られるのみの稀観本。

Ⅱ-5 江戸名所 上野不忍池 大判錦絵

初代歌川広重画 1832 - 34（天保3-5）年（江戸）佐野屋喜兵衛 刊

広重は数多くの江戸名所シリーズを手がけているが、その出世作であった保永堂版「東海道五十三次之内」と同時期に手がけたのがこの「江戸名所」「東都名所」シリーズ。本図は桜咲く、春の夕暮れの上野の不忍池のほとり、往来する人びとのかたわらにおもちゃ売りが描かれる。

Ⅱ-6 江戸名所四十八景 中判錦絵張込帖

二代歌川広重画 1860-61（万延元 - 文久元）年（江戸）蔦屋吉蔵 刊

江戸各地の定番の名所を、基本的にほぼ俯瞰構図で描いた中判錦絵四十八枚のシリーズ。化学染料の輸入がはじまった幕末の絵らしく、紫や赤、鮮やかな緑を印象的に使用している。

Ⅱ-7 東京詞 1帖

大沼枕山詞 春木南溟・奥原晴湖・滝和亭ら画 津田信全編・蔵版 1869（明治2）年刊

幕末・明治を代表する漢詩人大沼枕山が急激に変貌する東京に対する風刺的なまなざしを向けて詠んだ「東京詞」30首に、当時、活躍した南画系の絵師による風景画や人物画を取り合わせた画帖。洋風建築や病院、病院 日本橋を馬車で行く人々など新風俗も描かれる。掲出箇所は、坂田鷗客による九段坂と牛ヶ淵。背景に招魂社（現・靖国神社）がのぞく。

Ⅱ-8 東都花容月影譜 1冊

三木貞一著 尾形月耕画 1887（明治20）年（東京）九春堂 刊

副題は「東京めいしよ図譜」。東京の四季折々の名所、行事や祭礼を日本語・漢文・英語の3言語で紹介し、明治前半、日清戦争以前の国際感覚のありようがうかがわれる。掲出箇所は、花見の季節の上野から不忍池を臨む場面。

Ⅱ-9 東京開化狂画名所 横中判錦絵画帖

月岡芳年画 1881（明治14）年（東京）綱島亀吉 刊

横小判20図の画帖。東京の各地を舞台に、人々の失敗、化物・妖怪や動物との格闘を新時代の風俗とともに描く。掲出箇所は舟遊びで花火に見とれて着物がめくられて覗かれているのに気づかない芸者と洲崎の潮干狩りで巨大な赤貝

に手をはさまれて大慌ての人々。

Ⅱ-10 東京史蹟写真帖 1冊

戸川残花編 1914(大正3)年 (東京)画報社刊

戸川による巻頭の緒言によれば、明治44年の貴族院による「史蹟及天然記念物保存に関する建議案理由書」と史蹟名勝天然記念物保存協会の希望と趣旨を同じくするという。巻頭に近世初期の古地図を掲げ、史蹟の写真だけでなく由緒にも少なからぬ紙幅を割き、巻末に「東京名勝鏡」と題する番付を附録とするなど、江戸を歴史ある都市として顕彰しようという色彩が濃い。

Ⅱ-11 東京名所写真百景 4枚

1897(明治30)年(東京)藤井内蔵太郎刊
4枚に各25枚の写真を収める。江戸時代以来の名所と近代の新名所が交錯する。一枚めでは、皇居前の楠木正成銅像や九段坂上靖国神社の大村益次郎像がある一方、深川不動や亀戸天神、目黒不動などの寺社が交じる。隅田川の橋でも新大橋、両国橋は木造、吾妻橋は鉄橋であるのもこの時代ならではといえよう。

Ⅱ-12 東京写真帖 1帖

1907(明治40)年 大橋光吉編・刊
無刊記ながら、中野武宮の序文によれば、実業家大橋光吉が東京勸業博覧会開催を記念して刊行したという。区ごとに343図を収め、田山花袋による69ページに及ぶ東京案内が付載される。掲出箇所には明治の新吉原とともに船の行き交う隅田川、またそこで水泳する人々の姿がみえる。

Ⅲは「変貌を超え、歴史を貫く記憶とアイデンティティの継承」である。過去の都市生活は

記憶と記録をたどって探究され、語られ続けた。東京に至っても、都市のアイデンティティは表現され続けたのである。その言葉と図版による継承の軌跡をご覧いただいた。以下はそれを表すⅢの資料である。

Ⅲ-1 新編江戸志 半紙本 10冊

近藤義休原撰・義傳編 1775(安永4)年頃成写本

『江戸砂子』以後、同書の補綴を志した書物の一つ。旗本父子による原著に、江戸の地理を探究しことで知られた旗本で武家故実家であった瀬名貞雄・大久保忠寄らが本書記述の精度を高めるべく加筆した江戸の詳細な地誌。写本ながらも広く読まれて伝本も多く、大田南畝や曲亭馬琴によって読み継がれるなど大きな影響力をもった。掲出箇所は大久保による増補箇所、18世紀後半に隅田川河口に築かれたものわずか十数年で撤去された短命の盛り場中洲新地の記録。

Ⅲ-2 燕石雑誌 半紙本 7冊(巻4重複)

曲亭馬琴著 1811(文化8)年(江戸)和泉屋平吉・(大坂)河内屋太助ら5肆刊

当時、知識人のあいだで、前時代の事物について文献などによって探求した考証随筆の執筆が流行した。読本『南総里見八犬伝』で知られる馬琴による本書もその1つで、多岐にわたる物事を多数の書物を用いて論述する。とりわけ巻三には「わがをる町」として、俎橋をはじめとして馬琴の居住した飯田町付近の地名の由来などについて詳述されている。正岡子規文庫蔵本。

Ⅲ-3A 八十翁疇昔話 大本 1冊

財津種蕪著 1837(天保8)年 尚友堂蔵版 (江戸)紙屋徳八刊

享保期に80歳台であった老翁が幼少期以来の江戸風俗を語ったものとして広く読みつがれた記録がのちに刊行されるに至った書物。『むかしむかし物語』などといったさまざまな書名で数十に及ぶ多くの写本があり、多くに新見老人、新見正朝の名が付されていることからその談と考えられてきたが、昭和の書誌学者森銃三によって著者を財津種莖とすべきことが指摘された〔同著作集11〕。武家の生活風俗その他街の様子などが詳細に記される。これが版本刊行以前から広く読まれたことに、江戸時代前期の生活風俗への関心の高まりがうかがわれる。

Ⅲ-3B 異本昔ばなし 半紙本 1冊

3Aの刊本以前に広く流布した写本の1本。本書には前項のように森の指摘した通り「財津種莖翁の齢八十歳にあまりて」書き記したことが明記される。ところどころに異文があり、とりわけ巻末の6条および序文はまったく版本にはない記述。

Ⅲ-4 江戸から東京へ 全8編8冊(4編欠)

矢田挿雲著 1921-25(大正9-13)年

(東京)金桜堂書店(～4編)、東光閣(5編～)刊

大正期の江戸懐古趣味のなかで出された数々の書物のなかでも、平成の中公文庫に至るまで、くり返しさまざまな出版社が刊行し続けた、大衆小説作家による大部な東京の史蹟案内。区ごとに多くの史蹟を立項し、それぞれの現況と由緒や伝承を随想風に綴る。

Ⅲ-5 近世江都著聞集 半紙本 1冊

馬場文耕著 1757(宝暦7)年序 写本

講釈師として江戸の街の貴賤さまざまな人物などの噂を高座にかけたらしい文耕の数々の著作の一。八百屋お七、白子屋お熊ら芝居の種となって注目を集めた町娘たちや歌舞伎役者や名

高い遊女、島流しにあった絵師英一蝶ら、人の耳目を集めた人物について詳述し、世人の好奇心を満たしたであろう著作。

Ⅲ-6 都の手ぶり 半紙本 1冊

石川雅望著 刊年不記載 (江戸)英文蔵刊

江戸の町の諸相を、国学者としての知識を活かして、平安時代さながらの擬古文で記述した雅文集。初印は1808(文化5)年、角丸屋甚助版でその後印本。富沢町の古着市、両国橋の見世物、馬喰町の宿場、茅場町薬師の植木市、夜鷹(最下層の街娼)をとりあげ、江戸だけでなく全国各地から集まる人々の多様さ、光を当てられることのまれな貧困層の人々にまなざしを向けている。

Ⅲ-7 近世奇跡考 半紙本 5冊

山東京伝著・喜多武清画 刊年・版元未詳

江戸時代初期のさまざまな風俗・習慣の実態を、文献や伝承などに探ったいわゆる考証随筆。初代市川団十郎や伝説の豪商紀伊国屋文左衛門のような有名人物から(掲出箇所)、名もない物売りや些細な事物まで対象は多岐にわたる。初印は1804(文化元)年、(大坂)河内屋太助・(江戸)大和田安兵衛による出版で、本書は奥付のない後印本。

Ⅲ-8 あづまの手ぶり 大本 1冊

大西椿年画 1829(文政12)年 小林新兵衛・大坂屋源兵衛刊

あづま、つまり江戸の都市風俗を描くことを標榜し、街ゆく物売りや諸職人、芸能民の姿を江戸の四条派絵師大西椿年が捉える。多くは背景も捨象され、都市とはそこに生きる人びとであるというメッセージが直截に表現されている。

Ⅲ-9 武江年表 大本全8冊・半紙本2冊

斎藤月岑著 正編：1850（嘉永3）年（大坂）
河内屋喜兵衛・（江戸）須原屋伊八ら5肆刊、
続編：1882（明治15）年（東京）甫喜山景雄（我
自刊我書）

江戸の歴史を編年体で記した書。著者月岑は
江戸古町名主齋藤家当主として先々代より引き
継いだ事業『江戸名所図会』の刊行を完了した
後、江戸各所で行われる一年の行事や四季の景
物を概観した『東都歳時記』を上梓。その後、
手がけたのが本書で、それら2点の広告を付
して刊行された。全8冊にわたって、年々各
月日の天象、事件など、政治などの重要事項に
限ることなくさまざまな史実を町に生きる人の
目から綴る。月岑は本編刊行後も編纂を続け、
これに続く明治6年までの巻9～12は明治に
なって活字版で刊行された。

Ⅲ-10 高名聞人東京古蹟誌 一名古墓の露 1冊
大橋義三著・発行 1898（明治31）年刊

地域別に、その地にある著名人の墓とその人
物を紹介する。著名人の墓参は「掃墓」「掃苔」
として近代にはさかんに行われた。掲出箇所
の右は歌舞伎の主人公にもなった幡随長兵衛、左
の文章は絵師谷文晁、図は本展でも取りあげて
いる北斎の墓（浅草、誓教寺、その説明文は別
ページ）。

Ⅲ-11 文化改正 御江戸大絵図 1枚
南仙笑楚満人図 1813（文化10）年刊（江戸）
須原屋市兵衛・善五郎 刊

江戸図に付載するかたちで名所・名産（手工
業生産物）・売薬名方（名薬とその薬舗）・名物
（食料品とその産地）・名木（花とその名所）を
一覧にする。そこに何があるか／入手できるか
ということが、都市像の一部として地理ととも
に重視されていたことがかいま見える。

Ⅲ-12 絵本東物詣 半紙本 2冊
歌川豊広画・南仙笑楚満人文 刊年未詳（江戸）
和泉屋市兵衛 刊

江戸の十二月各月を寺社の祭礼でたどる絵
本。「東」（＝江戸）を題に冠する表象において
四季の行事が重要な要素であったことがよくわ
かる。本作は、本書のような薄墨入りの他に、
ギメ美術館蔵本のように彩色摺の本があるが、
こちらが初印で、薄墨本は1804（文化元）年
の色摺本禁令の影響を蒙って出されたものと考
えられる。

Ⅲ-13 願懸重宝記 中本 1冊
万寿亭正二著・勝川春亭画 刊年不記載（江
戸）西宮弥兵衛 刊

角書きは「江戸神仏」。江戸の寺社を、病の
種類や悩みごとに祈願できる内容とともに紹介
する絵入りの案内書。初印は1814（文化11）
年刊。祈願祈祷という切り口から見た江戸が浮
かびあがる。

Ⅲ-14 東都遊覧年中行事 中本 1冊
幽篁庵画 麗斎曙山画 1851（嘉永4）年序（版
元不詳）刊

巻首・尾題「東都遊覧年中行事」、見返しは「四
季遊覧 江戸年中行事」。江戸の年中行事を月日
ごとに1冊にまとめ、絵入りで提供した書物。
口絵は彩色摺りながら本文の挿絵は墨摺。「江
戸」は四季の行事というかたちでも表象された。

Ⅲ-15 御府内八十八ヶ所道知るべ 中本 3冊
二代歌川広重画 1869（明治2）年（江戸）〈発
願主〉大和屋幸助・三河屋利兵衛 刊

四国霊場八十八所に倣って、江戸の弘法大師
所縁の寺院を御府内八十八箇所と称した。その
1つ、幡ヶ谷不動尊別当莊嚴寺の主導で発願主
を立て世話人を募って編まれた各寺院の案内。

巡礼の便のため、番号ではなく地域別の編集となっている。奥付は1866（慶應2）年だが、第2冊に明治2年付けの文が摺られていることから後印か。

Ⅲ-16 歌川広重「名所江戸百景」大判錦絵2枚
初代歌川広重画 1756-59（安政3-6）年（江戸）魚屋栄吉刊

あしかけ4年で118枚および目録1枚、2代広重画落款の1枚が刊行された大判錦絵の揃物。生涯に30を超える江戸名所の揃物を描いた広重の最晩年の大作で、それまでとは異なり、ときに近像に焦点化し視覚的情報量を絞ったこんだ図様を含むことから、地方への土産というより視覚体験を絵師・版元と共有する江戸在住者に向け、祭礼や行事も折りまぜで各地の由緒や歴史を感じさせるしかけが凝らされた作品とされる〔大久保2007〕。

A 品川御殿やま 1856年

品川の御殿山は7代将軍吉宗が桜を植えさせて以来の花見の名所として愛されてきたが、1853（嘉永6）年、さらなる外国船の来航に備えて品川周辺の湾岸に砲台、つまりお台場を築造するためにその土が削り取られた。広重は表土をえぐられ変わり果てた御殿山を、以前と変わらず桜を楽しむ人々とともに描出した。

B 五百羅漢さゞら堂 1857年

本所五つ目の五百羅漢寺は人々の信仰を集め、独得の高楼建築三匠堂（栄螺堂）からの眺望が人気であったが、この2年前の安政の大震災で大破した。地震の影響やそこからの復興をときに描きとどめや広重だが〔原信田・北原2004〕、この景はかつての記憶のままに描き出している。

C 砂村元八まん 1856年

当時の中川河口、砂村にあった元八幡は桜の名所であった。当時は海に近い湿地帯であったこの場所も昭和に埋め立てられた。広重は「名所江戸百景」において『絵本江戸土産』以上に主題を広域に求めているが、その好例。

Ⅲ-17『絵本江戸土産』初～9編 中本9冊
初代歌川広重 1850（嘉永3）～1867（慶應3）年（江戸）菊屋幸三郎

百年近く前に西村重長・鈴木春信ら往年の浮世絵師が残した作品と同じ表題で広重が手がけた江戸名所絵本。初摺り本では4編まで題籤の下に東・西・南・北とあり、当初、4冊を東として出す予定であったが好評を博したため企画が継続したと考えられている〔鈴木1970〕。7編には「名所江戸百景 品川御殿やま」と同じく掘削された山肌が見えるように描かれ、2編に描かれたその前ののどかな御殿山の景とは異なる角度から捉えられている。

Ⅲ-18 御江戸繁昌双六1枚

三代歌川国貞画 1892（明治25）年（東京）長谷川園吉刊

明治20年代の旧幕時代回顧の風潮を受けて、江戸城内および将軍家の諸行事のさまを飛び双六に仕立てた作。日光や上野に参詣したり鷹狩りや猪狩りをしたりする将軍、奥の女性たちの様子など、旧幕時代に取材しながらもその時代には描き得なかった場面を描くのが逆説的。絵師三代歌川国貞は襲名後わずか3年ほどのこの年、豊斎と改名している〔及川2010〕。

Ⅲ-19 残されたる江戸1冊

柴田流星著 江戸川朝歌画 1911（明治44）年（東京）洛陽堂刊

江戸をふり返って、その風俗、習慣、行事、四季折々の行楽、名物を叙述する。とりわけ、

夏に軒先に吊す釣葱や朝顔の鉢などは今日にも残るものだが、鉢に蒔いた稗の発芽を水田に見立て、案山子などを配した稗蒔き、あるいは箱庭を楽しむ習慣の数々が特記され、暮らしの中の小さな自然を愛した「江戸ッ児」が回顧される。

Ⅲ-20 江戸の珍物 1冊

三田村鳶魚著 1913（大正2）年（東京）聚精堂刊

明治初年生まれ江戸研究の泰斗として知られる三田村鳶魚は、その全集が全28巻に及ぶほどに多くの著述を残した。そのうちの1つで、明治の末に語った、江戸の街の諸芸能、伝説の人物や事件、祭礼、制度などについての解説。掲出箇所は、中国から長崎に伝わった通称「唐人踊り」が「かんかん踊」として流行したことについての考証。

Ⅲ-21 江戸むらさき 1冊

笹川臨風著 1918（大正7）年（東京）実業之日本社刊

文学者・評論家、また俳人として活動した笹川臨風による江戸文化総論。文化史的な解説に続いて、大尽（富豪）や通人の項目を立てたり、「江戸の女」と題してその風俗や歴代の名妓を論じたりするほか、遊里に多くの紙幅を割き、四季の遊びや行事、料理・名物・名店を記述するなど、学術的というよりは、やはり江戸懐古趣味の横溢する著作。

Ⅲ-22 江戸の夕栄 1冊

鹿島浦船（万兵衛）著 1922（大正11）年（東京）紅葉堂書房刊

幕末生まれの著者が江戸の末年から明治初めについての記憶を記した書。江戸を一面的に美化するより、むしろ「犬の糞」「不潔の都府」、

はたまた「迷子探し」といった負の面に着目した項目も少なくない。「引廻し叩き放し」「日本橋の曝場」といった犯罪や罪人の扱いについての記述、「乞食芝居」や浅草寺境内の小芝居の項目もあり、大道芸や路上の芸能民下層の娼婦や被差別民にも紙幅を割いている。

何を展示したかー Site_C

ミュージアム・サテライトのボアソナード・タワー 26階は「Site_C」とした。ここは「現代の東京に息づく〈江戸東京〉」と題し、建物の記録や町のフィールドワークなどの今を探った。江戸東京の“intangible”な痕跡は、わずかながらも地域の片隅や私たちの日常に残る。Site_Cでは、まちのフィールドワークを通して採取された建物や人々の物語の“今”の記録から、それらの痕跡を探った。ここでご紹介したのは、風前の灯火とも言える「銭湯」「長屋」「旅館」などの江戸東京の固有の資源と、それらを取り巻く環境、そしてそこに存在する人々の営みであった。会場には数種類の模型が置かれた。法政大学デザイン工学部建築学科の授業におけるフィールドワークで行われた丹念な調査を元に、学生により作成されたものである。また、東京都文京区を拠点に地域の魅力を発信し続けている「文京建築会ユース」も、多様な手法で編集された記録を紹介してくれた。

CI 銭湯

展示：稲荷湯模型（フィールドワーク 2018）、稲荷湯写真、銭湯山車（文京建築会ユース）、銭湯山車巡行写真、おとめ湯図面（文京建築会ユース）、「文京の銭湯」他の記録冊子（文京建築会ユース、本郷のキオクの未来プロジェクト）

戦後の最盛期には2700軒近くあった銭湯は2021年現在、500軒を切ったという。銭湯は江戸時代から、人口の集中した都市部に特に多く存在し、親しまれてきたのである。今でも季節の変わり目を感じさせる様々な店主の気配りがある。家風呂の普及した現在では公衆衛生上の必要というより、地域コミュニティのハブとしての役割や、水資源を活用した防災拠点としての可能性、高齢者の見守り機能などに注目が集まっている。

この銭湯の展示は、「文京建築会ユース」が約10年にわたって行なってきた文京区界隈の銭湯の記録を中心に実施された。同団体が記録を始めた2012年から昨年までに、11軒あった銭湯は5軒へ減ったという。人々のつながりや暮らしのネットワークは、生活を支えてきた銭湯の喪失により、周辺の街並みも大きく変わりつつある。展示は、それら消えゆく銭湯を記録した膨大な資料の一部と、解体された銭湯から引き取った物品や材木によって作られた「銭湯山車」をご紹介した。「銭湯山車」は展覧会直前の2021年の夏、「今はなき銭湯を弔い、今を生きる銭湯を寿ぐ」をテーマに都内を巡行し、銭湯建築や銭湯文化の再評価を試みた作品である。

さらに、法政大学の学生が作成した現役銭湯「滝野川荷湯」の模型も展示した。調査を元に、銭湯としては都内で2軒目の国の登録有形文化財指定が実現し、現在は海外の財団からの資金援助で修繕や従業員用長屋の再生プロジェクトを行いながら、永続的な銭湯経営を目指しているという。これらの展示からは、消えゆく江戸東京の文化である「銭湯」の現状と、前向きにそれらを次世代につないでいく活動が見えた。

CII 長屋

展示：根津の長屋模型（フィールドワーク2017）、根津の路地図面（フィールドワーク2017）、根津の長屋の古写真（渡辺正晴氏蔵）、根津例大祭時及びイベント時の藍染大通り写真

文京区根津、藍染大通りに面した一帯の長屋は築115年以上と言われる。1923年の関東大震災を経験した6軒長屋は各所に震災の痕跡を残しながらも、住まい手たちによって修繕や増改築が繰り返され、今なお現役で大切に使われている。大正期の写真では、大通り沿いに味噌・醤油、酒屋、牛乳屋と並んだ6軒長屋と、路地を挟んで隣には米屋が見え、かつての商店街としての賑わいを感じられる。現在はケーキ屋や薬屋（令和3年1月閉店）、地域サロンとして活用され、米屋の一部は蔵を活用したギャラリーとして再生されている。6軒長屋の奥には、背合わせで同時代の長屋と生活路地が残り、江戸時代の暮らしぶりを彷彿とさせる住民間のやりとりが繰り返されている。展示では旧米屋の店が解体される直前に、法政大学の学生が調査を行って作成した。

長屋一帯の模型と、路地部分のみを詳細に写しとったパノラマ図面を紹介した。長屋は時代に合わせて増改築が繰り返され、路地は変化を遂げている。路地では住人たちが時折ゴザを広げ、持ち寄りのおかずで宴会を行うなど、今なお界隈のコモンスペースとして機能している。生活者同士の緩やかな関係が保たれたこの一帯は、これからの都市生活に多くの可能性を示唆している。さらに、長屋群が面した藍染大通りは、毎週日曜日に遊戯道路として歩行者に開放され、日常的な子供の遊び場となる他、野外映画祭やバザーなど様々な近隣住人のアクティビ

ティの受け皿となっている。また商店として使われてきた長屋の一角はその開放性を生かし、コミュニティ拠点として再生されている。当拠点、地域サロン「アイソメ」に関しては、Site_D「コモンズを再生する東京」でも紹介した。

C III 旅館

展示：朝陽館模型（フィールドワーク 2016）、映像「ゆめの形」（文京建築会ユース+nu）

明治10年、江戸の加賀藩上屋敷跡に東京大学が設置されるのを皮切りに、本郷一带には下宿屋が集積し、明治40年の全盛期には500軒を超えたといわれる。それらの下宿屋は、交通網の発達や全国からの修学旅行の活性に伴い旅館街へと変化を遂げる。しかし昭和50年には120軒ほどもあった旅館も、今では5軒にも満たない。旅館街の面影は消えつつある。そのなかで現役の老舗旅館「鳳明館」（令和3年6月より休業中）などの一帯はかつての風情をいまだに保持している。

このコーナーでは2018年に112年の歴史に幕を下ろした「朝陽館」の建築模型、三代目当主のインタビュー映像、また当時の下宿や旅館名簿から起こした分布図などを通して、本郷旅館街の物語を紹介した。学生による模型は、解体直前の100枚を超える実測図面を元に各部屋のデザインの違いまで細かく作り込まれ、地下の浴室まで丁寧に表現された。本郷の旅館の多くは滋賀県をルーツとし、その先駆けとして営業を続けてきた朝陽館は当時の旅館街の賑わいを伝える貴重な建物であった。中庭を介して渡り廊下でつながった3棟は、都心にありながら日常とは違った時間の流れを感じられる

空間だ。その一角の「蘭の間」では、かつて手塚治虫もカンヅメになって原稿を書いていたという。大小さまざま全45室の部屋は、傘を開いた形の天井や踊るような床柱など異なる意匠が施されている。これらは先代のご主人と若い大工が材料と対話しながら現場の創意工夫でこしらえた、今では再現困難なものである。本郷の旅館は時代の流れに合わせて役割を柔軟に変化させながら、利用者たちの多くの物語を蓄積し、明治以降の東京の記憶を後世に残す役割を担ってきたのである。

何を展示したかー Site_D

展示：写真、設計図、地図、文章

もうひとつのミュージアムサテライト・外濠校舎6階では「Site_D」として「コモンズを再生する東京2021」と題し、学生たちの提案による、建物や家の空間的資源活用の現在を紹介して、未来について考える契機とした。ここまで述べてきたSite_ABCは、Aが全体、Bが近世から近代、Cが近代から現代であった。そしてDは、現代から未来への展示なのである。

東京の都市空間は戦後、西洋的な建築手法や都市計画の方法をベースとして近代化してきた。しかし東京を歩いていると、今でも江戸が育んだ独自のコモンズすなわち共同体の残像が、至る所で顔をのぞかせる。それは、自治の精神を育んできた日本独特のコモンズとしての空間や場所なのである。コロナ禍において職住近接など地域で暮らすライフスタイルが求められる今日においては、いろいろな要素が混ざり合い共有された江戸を起源とするコモンズを研究し、可能性を再評価していく絶好のタイミングである。

この Site_D では、いくつかのコーナーを設けて展示を行った。建築家を中心とする EToS の専門家メンバーによる議論の成果をまとめたリーフレットを配布し、それらをさらに各コーナーで展開する。EToS のメンバーだけでなく、外部の建築家やまちづくりの実践者による commons を再生するための様々な仕組みを展示し、学生が実際に訪れた記録も展示した。さらに、東京 23 区に存在する「生きる commons」とも言うべき空間である「商店街」を全てプロットした「紐マップ」を作った。さらにいくつかの商店街を敷地に見立てたケーススタディを学生が作成し、近未来へ向けた提案を行った。これらが互いに重なり合うように展示デザインを工夫し、江戸から現代へと連続する時層的な都市を創造的に捉え表現した。

D I EToS メンバーの建築家の実践と、学生の批評によるレポート

[実践 1] 路上空間の活用拠点 地域サロン「アイソメ」(栗生はるか 文京建築会ユース・Mosaic Design Inc.)

[実践 2] 「紐」としての立体路地 食堂付きアパート (仲俊治・宇野悠里 仲建築設計スタジオ)

[実践 3] 紐状空間に作る新築の商店街 下北線路街 BONUS TRACK (山道拓人+千葉元生+西川日満里 ツバメアーキテクト)

D II 若手建築家の実践：「commons の再生」の最前線 と学生の写真によるレポート

・地域をつなぐ最小文化複合施設「HAGISO」 宮崎晃吉

・住まいと農業を絡めたネットワーク「ワカミヤハイターあだち農まちプロジェクト」落合

正行+ PET

- ・家守型のエリアリノベーション「co-toiro iwabuchi」金山了輔
- ・古い躯体を生かして作る東京都心の地域拠点「ミナガワビレッジ」神本豊秋+再生建築研究所
- ・職住融合型集合住宅による commons の創出「櫻の音 terrace」つばめ舎建築設計+スタジオ伝伝
- ・地域産業のハブの創出「KOCA」@カマタ+馬淵建設
- ・郊外における仕事を介した新しい場の創出「富士見台トンネル」能作淳平
- ・歴史を活かした持続可能な commons 再生拠点「板五米店」アルセッド建築研究所
- ・都市内農業と本屋を組み合わせた commons の創出「東久留米タルキプロジェクト」IN STUDIO

D III 東京 23 区の空間的資源と、学生の設計によるレポート

[実践 4] 商店街を抱き込む生活圏 (法政大学大学院都市デザインスタジオ 2020)

[実践 4-1] 歩行者空間の commons ネットワーク

[実践 4-2] 路地の「庭化 (commons 化)」

[実践 4-3] ポーラスな街区型建築

[実践 4-4] インテリア化する道

[実践 4-5] 住宅地の庭ネットワーク

[紐マップ] 商店街のプロット

プロットしてみると、東京 23 区の商店街はまるで紐をばらまいたように均等に分布している。

シンポジウムの実施

以上が、「江戸東京研究センター特別展〈人・場所・物語〉—“Intangible”なもので継承する江戸東京のアイデンティティ」の展示内容である。これらの展示だけでも、古代から現代を検証し未来に向けて新たな方向を模索するたいへん実りある展示であった。とりわけ、多くの学生たちが展覧会に関与する稀な機会であった。

さらに、この展覧会に合わせ、会期中の2021年9月19日(日)と9月26日(日)にシンポジウムを開催した。「都市をつくるのは誰か一定住者と流入者」「都市の表象文化名所から聖地へ」「コモンズを再生する東京2021」などをテーマとして構成し、最後にEToSの今後と、江戸東京研究のこれからの可能性を探った。概要は以下である。

9月19日セッション1:【都市のイメージ・表象、都市性】

都市性、つまり何をもって都市的とみるか、それはどのように表象されてきたか。時代をさかのぼり現代まで視野に入れて、広域かつ地域ごとの多様性の大きい江戸東京から考える。着眼したいのは二面性である。山の手と下町、表通りと裏通り、そして西洋的近代性と歴史性、あるいは西洋的なものとアジア的なもの——多くの二面性がこの都市を支えてきた。このさまざまな背景をもつ人びとが流入して雑多な要素が混淆し、多様な相貌を作りあげてきた江戸東京の「都市性」の歴史と今を議論した。

9月19日セッション2:【都市の表象文化、名所とアニメ】

江戸の都市の特徴として、自然と人工的な都市が密接に結びつき、市街地の内外に地形、自然条件を活かしながら名所を数多く生んでき

た。その情景がイメージ豊かに浮世絵、景観画に描かれ、都市文化を生んできた。それが近代の東京にも、変化をしながらも受け継がれてきた。EToSでは重要な研究の柱として、名所を地図の上にプロットしつつその成立の構造、意味を分析考察している。さらに現代では、アニメの表現のなかに、東京のやはり自然と結びついたスポットが様々に登場し、それがあらたな名所となり、若者の聖地となっている。本セッションでは、江戸から現代まで、この東京という都市空間に関する表象文化の系譜を議論する。9月26日セッション3:【次の近未来—コモンズとコミュニティ、自治】

EToSの中に、「都市東京の近未来」という研究プロジェクトがあり、主に建築の専門家が活動をしてきた。江戸が育んだ西欧都市の原理とは異なる様々な特質を明らかにした上で、その優れたあり方、よき特徴を受け継ぎながら、21世紀の価値観に見合う世界に発信できる近未来の都市へのビジョンを示すことを目指している。この一年、議論してきた研究テーマは、日本独特のコモンズとしての空間、場所が都市の内外に様々な形で存在し、コミュニティ、地域社会を形成し、そこには自治の精神も育まれてきたと考えられる点である。一連のブレインストーミングを重ねて去る3月13日に「コモンズを再生する東京」と銘打ったオンライン・シンポジウムを開催した。近未来に向けて可能性のあるコモンズとしての場、空間として「商店街」に光を当て、学生の調査提案も行い、同時に都内でコモンズの思想をもちながら地域再生を実現しているプロジェクトの実例を紹介した。3月のシンポジウムの内容をベースにして発展させる。

9月26日セッション4：【文明的な世界のあり方一定常型社会、江戸の持続性】

都市が拡大を続けた近代を経て、いま様々な部分で定常化した豊かな社会をいかに実現するか。江戸中期の定常型社会は世界でも稀で、そこから学べることは少なくない。その背景には、近世から近代にかけての家制度の変化が内在していると考えられる。そうした視点から、江戸時代を持続創生モデルとして見直したい。このことは西欧からも興味をもって注目されている点であり、EToSが世界の拠点として果たす役割を発信する可能性を大きく持っている。日本は災害が多く物理的なモノが残らないといわれるなかで、地形や地名、また身体性や精神性に関わるものは多く持続しているようにも思われる。日本の近代化過程で盲目的に突き進んだ、堅固でゆるぎない、時の後退を許さない近代的な思考からいかに脱却し、本来の都市と人間の原理のようなものにどのようにして立ち返るべきか。いま文明的な世界のあり方を正面から問う時代にある。

おわりに

以上が、「〈人・場所・物語〉—“Intangible”なもの—」の展示とシンポジウムの報告である。シンポジウムは書籍化されることが決定しており、さらに詳細な内容をご覧いただける。

EToSは、地球温暖化、低成長、高齢化・少子化が進行するなかで、いかに価値観を転換させるか、どのように都市のあり方を問い直すべきか、という課題を追求している。すでに自然との対話、歴史の振り返り、コミュニティなど深い人間関係の喪失から長い時間を経ている。

それらをいくらかでも回復し、新たな時代を切り拓くために、「新・江戸東京研究」が必要である。「新・江戸東京研究」は従来の「江戸東京学」よりはるかに長い時間を視野にいれている。それは本展覧会が示したように、古代から未来に渡る。

また、研究領域の範囲もはるかに広がっている。従来のような人文社会学のみならず、景観工学、都市工学、建築学、地理学、文化人類学をつなげていく。さらに、ヴェネツィアを筆頭とする海外の都市との比較をも含む。

広い視野と足元の生活の両方を軸にして、自然とともにある新しい都市の活性を次世代に残すべく、「新・江戸東京研究」を今後も展開していきたい。

注：展示についての情報は、ミュージアム図録も参考にした。シンポジウムについては構成案なども参考にした。実際のシンポジウムの経過については随時、報告と書籍が刊行される。

▼参考文献

- 及川茂 (2010) 「国政四代、国貞三代 香朝楼豊斎——知られざる「明治の江戸っ子」絵師——」『日本思想史』第77号
- 大久保純一 (2007) 『広重と浮世絵風景版画』東京大学出版会
- 斎藤直茂 (1981) 「江戸切絵図の歴史」「吉文字屋版について」『江戸切絵図集成』第1巻 中央公論社
- 原信田実・北原糸子 (2004) 「地震の痕跡と『名所江戸百景』の新しい読み方」『人類文化研究のための非文字資料の体系化：年報』
- 神奈川大学 21世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
- 森銑三 (1974) 『森銑三著作集』第11巻 中央公論社

(たなか・ゆうこ

HOSEI ミュージアム館長・法政大学名誉教授)

New Research into Edo-Tokyo: Hosei University Museum and Hosei University Research
Center for Edo-Tokyo Studies: Special Exhibition for AY 2021:
'People, Places, Stories': The Identity of Edo-Tokyo Inherited through 'Intangible' Objects

Yuko Tanaka

Abstract

The main theme of this paper is "What is the aim of New Edo-Tokyo Studies?" In order to clarify this, I introduced the exhibition "'People, Places, Stories': The Identity of Edo-Tokyo Inherited through 'Intangible' Objects" in this paper.

First, I described the background of the establishment of the Hosei University Research Center for Edo-Tokyo Studies (EToS), which planned this exhibition, and showed its achievements. In the three and a half years between the center's establishment in January 2018 and this exhibition, there were 89 symposiums and workshops, including 13 international symposiums, with a total of 8,630 participants, 49 books and reports published, 126 papers and conference presentations, and frequent media appearances.

The history of Edo-Tokyo Studies at Hosei University has continued from prewar times to the present day. EToS is now including not only research in the humanities, but also research on urban design and society, opening a new research field as interdisciplinary urban and regional studies. For the title of this exhibition, EToS used the word "Intangible" (invisible). Edo-Tokyo has been through a series of fires, floods, earthquakes, and wars in the past, and because of these disasters, the city has gone through a short cycle of scrap and build. Even so, the identity of Edo-Tokyo has been maintained by the flow of water that has continued to flow underneath the city while people have watched it change and transform, the undulating topography, the living space consisting of large buildings and small objects, the nature of the suburbs, the place names of Edo-Tokyo, the memories, stories, and legends associated with each place, and the people who lived and worked there. This is because we have experienced and passed on the memories, stories, and legends of each place, as well as the people who lived there, their activities, and their liveliness. They are intangible heritage. Based on this recognition, EToS has named this exhibition, "The Identity of Edo-Tokyo" as an exhibition that considers Edo-Tokyo as a city supported by its intangible heritage, which is inherited through the intangible things of people, places, and stories.

In the Edo period, these legacies were based on a steady-state society that prioritized sustainability. Unfortunately, Tokyo is heading in the opposite direction, but by considering the continuity with Edo, it is possible to inherit the past and explore a path toward the future. In other words, one of the important goals of this exhibition was to show the shift in values and the direction toward a sustainable society. This paper also guided the details of the exhibition using the four venues of Ichigaya Campus.

Keywords: Edo-Tokyo Studies, sustainable society, water city, waterside, topography, memory, community, urban design, tenement house